キリストのかたち(2) 今を自由に生きる　　コロサイ 1:9-14

人生は「過去・現在・未来」、「きのう・きょう・あす」で成り立っています。もし、人生に未来への希望がなければ、私たちは生きる意味も目的も失ってしまいます。そうですね明日は何か良いことが起こるかもしれない、うまく行くかもしれないと思うから前向きに生きてゆこうと思います。また、私たちが、過去に神様から受けた恵みと祝福を忘れると、つまり自分が頑張ったから、切り抜けて来られたなどと思い上がってしまうと結局、神様の憐れみと祝福に鈍感になってしまって、神の祝福を受けられなくなってしまいます。クリスチャンはどんなに平凡な日々を過ごしていたとしても過去に神様が与えてくださった恵みと祝福をいつも思い返しながら、未来に用意されている天の御国の希望に生きる者なのです。過去への感謝と将来への希望に生きる人は本当の意味で今を自由に生きている人と言えます。

ところがそれとは違う生き方をしている人がいます。まず今を生きているようで過去に生きる人。つまり過去に対する後悔や反省、時には怒りを持つ人です。今を生きているにもかかわらずいつも心は過去に捕らわれているのです。また今を生きながら未来という夢の世界を生きている人がいます。つまり現実を受け入れられない人ですね。今、何か失敗したりうまく行かなかった時にそれはたまたまだとか、私の実力はそんなものではない。そんな風に考える人です。また今を生きていながら将来の心配ばかりしている人もそうだと言えます。そんな生き方をすることは、べつに悪いわけではありません。ただ生きづらい、あるいは生きてゆくのが大変なんだろうなと思ってしまいます。聖書にはそんな私たちのために、神は、私たちの過去を清算し、未来を与えてくださいました。聖書はいたるところにそのことを書いており、今日のコロサイ 1:9 から始まる使徒パウロの祈りの中にも表われています。

1）現在のための祈り

パウロは 9 節で「こういうわけで、私たちもそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。」と言ってから「どうか、あなたがたが、あらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころについての知識に満たされますように。また、主にふさわしく歩み、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる良いわざのうちに実を結び、神を知ることにおいて成長しますように。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。」(9-10 節)と祈りました。この祈りの中に「歩む」という言葉があります。聖書では「歩む」というのは日々の生活を表わしますので、この部分は、私たちの「きょう」のための祈り、現在のための祈りと考えて良いでしょう。神のみこころを知る真の知識、霊的な知識、信仰的な知識が、日々の歩み、つまり、現在の生活の中に実を結ぶようにとの祈りです。

教会に来て賛美をささげ、祈りをささげ、みことばに聞き、みことばを学ぶ。そのようなことは一昔前には意味があったかもしれないが、現代のような忙しい時代には無駄なことだと言う人もいます。しかし、聖書は、神を知ることが私たちの日々を生かし、実りある人生を与えると教えています。とは言うものの、木が実を実らせるようになるまでは、何年もかかります。そのように、神を知ることが人生の実りとなるのにも時間がかかるのです。木が実を結ぶというのは、クリスマスツリーに飾りをつけるようなわけにはいきません。それはインスタントなことではないので、人々は神のことばと現実の祝福との関係を見落とすことが多いのです。

私たちのキリストに結ばれた人生は、信仰によって植えられ、バプテスマの水を注ぎかけられて始まります。そのときは、何もかも新鮮で、生き生きしていたのに、やがて、自分が少しも成長していないように感じられる期間を体験することがあります。信仰のスランプのような時、冬のような時です。しかし、そんなときも礼拝を休まず、聖書を読み続け、日々の祈りを止めなければ、神は信仰の冬の間も私たちのうちに働き続けてくださいます。木が冬に葉を落とし、枝を伸ばすことがなくても、大地に根を下ろし、春に花を咲かせ、夏に葉を茂らせ、秋に実を結ぶ準備をするように、私たちにとっても人生の冬、信仰の冬は無意味ではないのです。むしろ、それによってしっかりとキリストに根を下ろし、キリストに結びつくことができるのです。キリストのことばを私たちの内に豊かに住まわせましょう。それによって「わた

しにとどまりなさい」（ヨハネ 15:4）と言われたキリストにつながり続けることができるのです。このとどまるとはそこにいるというよりも生活する、住むということです。

２）未来のための祈り

次にパウロは未来のために祈ります。11 節と 12 節です。「神の栄光の支配により、あらゆる力をもって強くされ、どんなことにも忍耐し、寛容でいられますように。また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格をあなたがたに与えてくださった御父に、喜びをもって感謝をささげることができますように。」この祈りの「聖徒の相続分」とは、信仰者が神の国を相続することを言っています。天国を相続する。これは考えただけでも、わくわくすることです。天国に入れることは大きな喜びですが天国を相続するとは例えようのないくらいの驚きです。キリストに従う者の現在は、霊的な実で満たされるのですが、その未来は、もっと素晴らしいのです。聖書によれば、地上で体験する、愛、喜び、平安などの御霊の実は、天国の前味わいに過ぎないのです。天国に行ってからが本番です。昔、住んでいた大学生の寮の仲間と寮の創設者の宣教師の国、アメリカに旅行に行ったことがあります。私にとっては生まれて初めての海外旅行です。昔はハワイで乗り換えでした。飛行機会社のミスで座席がダブルブッキング（二重予約）となり、結局我々はファーストクラスに乗ることになりました。食事も前菜から順番に時間をかけてＣＡの方が運んできてくれます。前菜としてサラダと共に海老やら生ハム、ローストビーフが最初から出てきましたので田舎者の私たちはこれがごはんだと思いまして、お代わりは大丈夫だと知ると、二度も三度も注文し、メーンの料理が出てくる前に結構おなかが一杯になったということがありました。恥ずかしい思い出です。私たちの地上での信仰生活も今しかないと思いますと他人のために時間やお金やものを用いることをためらう人がいるかもしれません。特に過去を悔やんでいるような人であればさらに犠牲を払うことや奉仕をためらうでしょうね。しかし神様は信仰者は将来、及びもつかないほどの相続を受けることを約束してくださっていることを覚えていただきたいと思います。

この天国の希望が、初代教会の信仰者たちを支えました。迫害の時代、役人たちはクリスチャンの資産家を狙いました。クリスチャンで財産のある者たちは自分の邸宅の一部を教会堂として提供していました。そうした資産家に難癖をつけてその財産を奪えば、クリスチャンは集まる場所を失い、散らされていきます。その上、役人は、奪った財産を自分のものにして、私腹を肥やすことができたのです。一挙両得とはこのことです。そのため、一夜にして財産を失い貧しくなった人々が多くいました。しかし、それらの人々は、天に蓄えられた財産を思い見て力づけられたのです。このことばは、現代の私たちにも真実です。現代では初代のクリスチャンが経験したような迫害を経験することはないとしても、信仰者は、そうでない人とは違う価値観で生きようとしますから、どこかに衝突や摩擦が起こる可能性があります。実際の衝突や摩擦がなくても、心の中での戦いはきっとあるでしょう。しかし、そうしたことに勝利し、神のみこころを選びとっていくとき、私たちは未来の希望に生きることができるのです。信じる者の未来には希望があります。神はこう約束しておられます。「わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている――主のことば――。それはわざわいではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」（エレミヤ書 29:11）私たちは聖書に約束されている天での幸いを信じ、それを心にとめて歩むことによって、この地上での歩みを意味あるものとすることができます。たとえ地上の生活にどんな困難や苦しみ、痛みがあったとしても、信仰者には将来の希望があります。死のかなたにも天国の望みがあります。それによって困難を乗り越え、苦しみの中でも慰めを受け、痛みを癒されるのです。11 節に「神の栄光の支配により、あらゆる力をもって強くされ、どんなことにも忍耐し、寛容でいられますように」 とあるように、力強く自由に今を生きることができるのです。

３）過去のための祈り

さて、最後に、過去のための祈りを見ておきましょう。それは 13 節と 14 節です。「御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子にあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」この祈りの中には、キリストによる過去からの解放が

宣言されています。私たちはみな、生まれながら「罪と死の奴隷」でした。過去に犯した罪に縛られ、また、やがてやってくる死への恐怖にも縛られていました。神を持たず、キリストから離れ、暗闇の中に住んでいたのです。どんなに恵まれた環境の中にいたとしても、その心に光がなかったのです。しかし、神は悔い改めてイエス・キリストを信じる者を暗い過去から解放し、光にあふれた未来へと導いてくださいました。イエス・キリストによって「贖い」を得たのです。

「贖い」ということばは、今日の私たちには、あまり馴染みのないことばですが、ローマ帝国の時代には、日常的によく出てきて誰もが理解できることばでした。その時代には、自由人はほんのわずかで、多くが奴隷でした。奴隷といっても皆が重労働をさせられたわけではなく、中には皇帝の家庭教師だった学者もいましたし、主人の財産をすべて任せられた人たちもいました。しかし、その人がどんなに優れた人であったとしても社会的立場が奴隷であるなら、決してローマの市民としての特権を持つことはできず、自分が管理を任されている財産を相続することは決してできないのです。相続することができるのは、その家の子どもだけです。奴隷はそのままでは、どこまで行っても奴隷のままでした。しかし、奴隷にも「贖い」によって自由になれる機会がありました。「贖い金」というものを払って自由人となることができたのです。ただ自分で「贖い金」を貯めて自由になれた人は殆どいませんでした。みことばにあるように罪と死から贖われるということについては、誰ひとり自分のために十分な「贖い金」を用意することはできません。自分の罪と死について私たちの償いでは到底間に合わないのです。誰か、他の人によって贖ってもらうしか道はないのです。その「誰か」とはイエス・キリストです。キリストは私たちを罪の奴隷から解放するために、あの十字架の上で血を流し死に、ご自分の命を「贖い金」として、私たちのために差し出されたのです。そればかりではなく、キリストは三日目に復活され、私たちを死の恐怖からも解放してくださいました。キリストの十字架と復活によって与えられた罪の赦しと死からの救い、これが「贖い」です。キリストの「贖い」こそ、私たちが暗やみから光へ、死から命へ、奴隷から自由へと移ることのできるただ一つの道なのです。

多くの人は、過去に囚われてそれに縛られています。若い人ばかりでなく、何歳になっても、自分の両親を赦せなかったり、過去の傷に苦しみ続けている人が多くいます。今の時を生きながら、過去に囚われているのです。それはとても悲しいことです。また今を生きているのに現実を受け入れることが出来ないで夢と理想を追いかけている人も多くいます。ただ人がどのようにして信仰者となったかを良く考えると過去の悲しく、辛い経験が救い主を知るきっかけになった人は多くいると思います。そうすると過去の悲しく、痛い経験もまた、私を未来の栄光に導くためであったと言えるわけです。あるいは現実のちっぽけな自分を見ると将来に対する不安と恐れで確かな平安と希望を求めて教会に来るようになった人もいます。楽しくて良いことばかりなので教会に来ましたという人は非常に少ないと思います。イエス・キリストは私たちの過去、現在、未来にわたって共に居て下さいます。過去、現在、未来とは永遠と言い換えることが出来ます。そして永遠のいのちとは過去のことに解決を与え、現在を力強く歩み、未来に希望を持って生きることの出来る神の御力、キリストのみわざとも言えます。ヨハネ 17:3 に「永遠のいのちとは、唯一まことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」とあります。キリストを知れば知るほど、過去の囚われ、未来への不安から解放されて今を自由に生きることができるのです。イエス・キリストとは私たちの過去、現在、未来に影響を与える全き権威と力を持ったお方なのです。イエス・キリストを知ることこそ最も私たちが時間とエネルギーを注ぎ込む対象となるのです。主イエスはおっしゃいました。

「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」ヨハネ 8:32

この真理とはイエス・キリストのことです。キリストと共にこの週も歩んでまいりましょう。

祈ります。